

加藤周一と「日本語の運命」—— 雑種文化論への過程

Kato Shuichi and Fate of the Japanese Language:
the steps towards the Hybrid Culture Theory

半田 侑子*

はじめに

加藤周一「日本文化の雑種性」(1955)は、半世紀以上前に執筆された。近代化に伴う急速な西洋化に端を発する日本文化のありようを論じた「雑種文化論」の射程は、日中韓全体に及ぶという問題意識は加藤の生誕百年講演録集『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』(水声社、2020)で明確に示された。今年に入っても、片岡大右「アジアの複数性をめぐる問い——加藤周一、ホー・ツーニエン、ユク・ホイの仕事をめぐる」(『群像』77(7)、2022年7月)に取り上げられるように、現在も加藤の論考はアジア地域の文化と思想を論ずる上で重要な位置を占める。

これまで「日本文化の雑種性」は加藤の1951年から三年あまりに及ぶフランス留学経験と非常に密接に語られてきた。『続羊の歌』の「第二の出発」は加藤の雑種文化論の出発点と見られることがしばしばある。以下は「第二の出発」において、加藤がフランスの青年とヴァレリー『エウパリオス』を丹念に読み、東京で「その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいたが、私が理解したのは、すじ書きにすぎなかった」ことに触れた部分である。

*衣笠総合研究機構研究員(加藤周一現代思想研究センター)

おそらく私ははるかに広くロシアの小説家やフランスの詩人やドイツの哲学者を知っていたと思う。しかしフランスの青年が母国語とその古典にむすばれているほど確かな絆で、日本語とその古典にむすばれてはいなかったろう。私の文学的教養は、国際的に横に広がって浅く、彼の教養は自国の歴史を縦に通して、深かった。私はそういう対照から強い印象をうけた。はるか後になって、『雑種文化』という文章を書き、日本の状況に潜在している可能性を強調したときに、私は大学町でのその経験を思い出していた。私は横に幅広い教養を「雑種」とよび、縦に深い教養を「純粹種」と名づけ、現代の日本人にとってもはやその二つの型のどちらかを選択する自由はなく、したがって「雑種」の型に積極的な意味を見出すほかない、と論じたのである。(加藤周一『続羊の歌』1967)¹⁾

雑種文化論の着想に渡仏が大きな影響を与えたことは疑いようがない。しかしその一方で、加藤が一連の「雑種文化」論を執筆した動機の大部分を渡仏の経験によって説明できるとは言えないのではないか。むしろ、渡仏の影響と同程度に、敗戦から渡仏までの期間に加藤が何を考えていたかにも注意を払うべきである。そう考えるのは、加藤自身、渡仏経験のみによって彼の思想の連続性を軽視されることに異議を唱えていたからだ。

私が外国旅行の結果はじめて日本の文学・芸術に興味をもち出したかのようにいうものがある。しかし能舞台や、定家とその周辺に、私が傾倒したのは、戦争中御用学者が日本文学をそれとは全くちがう面で強調していた時代であり、京都の庭をまとめてみて歩いたのは、戦後「近代化」が相言葉となり、祖先の偉業を偲ぶことの流行しなかった時期である。そしてそういう事柄について私がこれらの文章を書いたのは、すべて外国旅行以前、占領下の日本においてであった。私は日本の芸術を好

んでいた。だから西欧に渡って、おそらく西欧中世の美術を好んだのであり、その逆ではない。(加藤周一『知られざる日本』あとがき、1957)²⁾

以前、拙論「『日本文化の雑種性』の成立について」³⁾において主として留学中や、帰国し「日本文化の雑種性」を執筆する直前までの加藤から、雑種文化論へ至る背景を探った。本稿では、渡仏より少し遡って、敗戦後の加藤の足跡をたどる。

日本の芸術と文学に関する論をまとめ、渡仏の直前に刊行した『美しい日本』(1950)におさめられた「『現代詩』第二芸術論」(1949)、「日本語の運命」(1949)には、ともに日本語そのものを厳しく問い直す加藤の姿勢が顕著にあらわれている。以下は『美しい日本』のあとがきである。

戦時中に偏つて不当に高く評価された日本の芸術と文学とは、戦後には、偏つて不当に低く評価されるか、むしろ忘れられようとしてある。しかし、日本の文化の偉大さと惨めさとは、同時に二つながら認められないかぎり、一方が正しく認められるといふこともないはずである。

わたくしはここにあつめた作家論のなかで、美しい日本をつくるための条件を考へようとした。何故なら、美しい日本は、すでにあるものではなく、絶えずつくりだすべきものだからである。「日本の庭」は、芸術の偉大さに触れ、「現代詩第二芸術論」と「日本語の運命」とは、主として言葉の惨めさに触れてゐる。日本のすぐれた作家たちは、つねにそのあひだにはさまれてゐた。(加藤周一『美しい日本』あとがき、1950)⁴⁾

日本語を主題とする二つの論考について「言葉の惨めさに触れ」たという加藤は、雑種としての日本文化に「小さな希望」を見出す1955年の加藤とは、ずいぶん距離があるように見える。またこの時期の加藤の挑発的な言い

回しが、ながく加藤につきまとった西洋崇拜者という印象を助長するものであったことは否定できないだろう。このような状況があったために加藤は、渡仏を経て日本回帰したわけではないと断っておかねばならなかったのだ。

加藤が「日本文化の雑種性」において「日本文化の純粹化運動」に触れて、「純粹日本化にしろ、純粹西洋化にしろ、およそ日本文化を純粹化しようとする念願そのものを棄てることである」⁵⁾と論じたことはよく知られる。敗戦と占領を経験した日本が主権を回復するに伴って、ナショナリズムの高揚が起り、日本文化を再考する機運が高まっていたことは拙論「日本文化の雑種性」の成立について」においても触れた。そのような状況において、日本文化から西洋の影響をできるだけ取りさって本来の日本文化を求める動きがあったとして、そちらは理解がしやすい。しかし、もう一方で、日本文化から「日本種の枝葉をおとして日本を西洋化したい」⁶⁾という主張があったのだろうか。これは今日の我々の目には、とりたてて論ずるまでもない荒唐無稽な主張に見える。

だが加藤は敗戦直後、樋口陽一が「日本的なるものへの呪詛」と呼んだほどの激しい怒りを吐露した時期がある。それに敗戦直後の加藤の「怒り」に注目したのは樋口だけではない。樋口が加藤の「日本的なるものへの呪詛」を指摘した講演録集『加藤周一を21世紀に引き継ぐために——加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』⁷⁾において、海老坂武も「〈戦争文化〉への抵抗をめぐる」(2020)中で1946年以降の加藤の「激しい怒り」に言及していた。本稿では海老坂がとりあげた加藤の論考「日本語の運命」(1949)⁸⁾を軸にして、敗戦後の加藤と日本文化との関係に注目し、敗戦直後の加藤における「日本的なるものへの呪詛」「激しい怒り」の「日本文化の雑種性」への影響を論じたい。

第1章 樋口陽一、海老坂武の議論における敗戦直後の加藤周一

1、樋口陽一による加藤における「ダイナミックな連関」

加藤について樋口は「加藤周一ほど『三酔人経倫問答』の描く「洋学紳士」から遠く、まして「経済大国」下の「日本人論」者からかけ離れた存在はない」と評する。樋口は加藤に内在する日本文化への両義的な道筋を簡潔に述べる。

一九四五年をはさむ時期に書かれた日本的なるものへの呪詛は、『万葉集』や『源氏物語』を「世界一流の文芸作品」とする国文学者の「迷信」を切って捨てて見せるほどのものだった（『1946 文学的考察』）。それはなるほど、「西洋かぶれ」の青年を想像させるかもしれない。しかしその同じ時期に同じ本の中で『金槐集』へのオマージュが語られており、それどころか、医学部学生加藤がすでに、長文の実朝論を公にしていた（『加藤周一青春ノート』二二七頁以下、及び編者による註1）。「日本の庭」が書かれているのも、足かけ四年に及ぶヨーロッパ体験に先立ってのことだった。（樋口陽一「加藤周一は「洋学紳士」か、それとも「日本人論」者か？」2020）⁹⁾

敗戦後の加藤は『1946 文学的考察』（1947）によって、福永武彦、中村真一郎とともに出発した。同じ頃に刊行した『マチネ・ポエティック詩集』（1948）による試みも、マラルメやヴァレリーに大きく影響を受けた押韻定型詩であったし、「抵抗の文学」など精力的にフランス文学を中心とするヨーロッパ文学について論じた¹⁰⁾。「国文学者の「迷信」を切って」捨ててみせた加藤の仕事は、「西洋かぶれ」と揶揄されるほどフランスに引き寄せられていたのだ。しかし、樋口は加藤の辿った道筋についてこう述べる。

たしかに、「洋学紳士」、「日本人論」者であるかにも見える点景が遺されてはいる。その点景があったればこそ、画家みずからがそこから『日本文学史序説』（一九七五年、八〇年）や『日本文化における時間と空間』（二〇〇七年）を描き切ることに結びついたのではないか。そして、その展開の中で肝要な位置を占めるのが、「雑種文化」論だった。——これが、報告の骨ぐみであり、そこで示そうと試みる加藤におけるダイナミックな連関を多少なりとも伝えたいゆえの、報告標題なのである。（前掲樋口）¹¹⁾

このように樋口は、「洋学紳士」「日本人論」者であるかにも見える加藤の「点景」に言及している。樋口の指摘において重要であるのは、一見、加藤自身の一貫性を脅かすかのようなこの「点景」があったればこそ、『日本文学史序説』から『日本文学における時間と空間』に至る「加藤におけるダイナミックな連関」があったという点である。樋口のいう「ダイナミックな連関」をもたらした「点景」は、樋口が引用した『1946 文学的考察』や、後述する「日本語の運命」がそれにあたるだろう。ここではまず、『1946 文学的考察』に収められた「我々も亦、我々のマンドリンを持っている」（1946）を確認したい。

祖国を誹謗する者はもとより卑劣であるが、徒らに祖国を讃美する者は、愚昧である。事實は直視しなければならず、日本の事實は、何ひとつとして、のどかなものはない。

観光日本は、しばらく措く。皇国日本のマンドリンは、万葉の精神、ものあわれと幽玄と武士道、少し無造作に云えば、西洋の物質文明に対する東洋の精神文明である。マンドリンの弾き手は、主に、国文学者から成る一隊であって、軍国主義政府の弾圧政策が、国内の凡ゆる文化を破壊し、一掃した戦前及び戦争中の精神的荒野に、賑々しく登場し、

陰険に便乗し、盲目的に支配し、世の青年子女を毒して、その理性を麻痺させるために、狂信的で、煽情的な歌を、歌いつづけた。皇国日本は、民主主義日本になっても、マンドリンの弾き手は、一応沈黙するか、更めて便乗し直しているとしても、彼等が毒した良家の子弟は、容易に理性の道に戻ろうとはしない。我々はまだ、我々のマンドリンを、持っている。信州の山の中では、小学校の教員が、『万葉集』を輪講している。(加藤周一「我々も亦、我々のマンドリンを持っている」1946)¹²⁾

「我々も亦、我々のマンドリンを持っている」という題名は、加藤が少なくとも大学時代から親しんだジャン・リシャール・ブロックが1933年4月『ウーロップ』124号に発表した同名のエッセイから借りたものである。岩津航によれば、マンドリンとは、加藤が敗戦後、激しく非難した同世代の知識階級の青年たちの理性を麻痺させたプロパガンダの伴奏としての「ステレオタイプの伝統を喧伝する「マンドリン」であるという¹³⁾。

この論考において、樋口の指摘するように、加藤は『万葉集』や「万葉の精神」までも厳しく批判している。ここで加藤が「皇国日本のマンドリン」として挙げる「万葉の精神、もののあわれと幽玄と武士道」などは「西洋の物質文明」に対する「東洋の精神文明」の例として皮肉な調子で並列されるが、武士道の評価はともかくとして、後年加藤が『日本文学史序説』において程度の差はあれど、一定の評価を与えるものである。ことに『万葉集』と能を加藤は高く評価した。さらに言えば、加藤は子供時代から『万葉集』に親しみ、大学時代は『万葉集』輪読回に参加するほどであった。しかし、だからといって、敗戦直後の加藤の軍国主義政府に対する激しい怒りとともに表明された日本文化への批判を、いつきのものとして、加藤の思想の連続性から除外してよいのだろうか。そうではなくて、おそらく、読み親しんだ『万葉集』をも攻撃せずにおれないほどの、「日本文化」に対する深い絶望こそ、加藤が「日本文化の雑種性」へ向かう内的な動機のひとつだったのでは

ないだろうか。

国文学者の罪悪は、要するに、シナ文明から独立し、対等に、日本文明と云うものが存在するかのごとき錯覚を普及させ、その錯覚の前提の下に、日本の古典を便乗の道具でなければ、逃避の口実として、怯懦な青年の玩弄するマンダリンと化した点にある。(「我々も亦、我々のマンダリンを持っている」)¹⁴⁾

このように、加藤は日本の文化が、抜きがたく中国文明に育まれたことを自覚しているが、同時に日本文明の自律性にまで疑問を投げかける。同じ『1946 文学的考察』に収録された「焼け跡の美学」において、加藤は「焼け跡の美学、東京の巷の焼け跡の美学が可能である如く、日本の精神の在り方も徹底的に破壊された跡でなければならない」¹⁵⁾という。加藤が「日本的なるものへの呪詛」を口にした時代は、同時に新憲法制定に向けて動き出した時代であった。日記帳「Journal Intime 1948 1949」¹⁶⁾の最初のページに、加藤は世界人権宣言全文の小冊子を挟みこんでいる。戦後日本民主主義の出発点において、加藤はすでに、『1946 文学的考察』において「我々の自由や人権や理性を再び踏みにじられる」¹⁷⁾ことへの危惧を表明していた。そのような文脈の中で発表したのが「日本語の運命」であった。

2、海老坂武「〈戦争文化〉への抵抗をめぐって」における「日本語の運命」

本稿の冒頭で述べたように、海老坂も「〈戦争文化〉への抵抗をめぐって」において、敗戦直後の加藤の「激しい怒り」¹⁸⁾に言及する。その「激しい怒り」の具体例として「日本語の運命」が紹介されるが、まず海老坂の議論を追うことから始めたい。

海老坂は第一に、〈戦争文化〉という言葉の定義から始める。海老坂によれば、フランス歴史学において〈戦争文化〉(la culture de guerre) という概

念は第一次世界大戦研究のなかで作り出され、「戦争と共に生じた文化」という意味合いで用いられているという¹⁹⁾。〈戦争文化〉の分析のための材料は兵士たちが戦闘の合間に作った新聞や、日記、書簡等だが、それに対してフランス歴史学の内部から批判があがったという。つまり、日本の歴史に鑑みると、日中戦争、太平洋戦争時の日本兵たちの文章、例えば『きけ わだつみの声』を日本の国民感情の共通文化として分析することの問題と対称性があるのだ。「そこには当時の政府からのプロパガンダの言葉、戦争に協力する知識人の言説がいたるところに埋め込まれているからである」と海老坂は説明する。しかし、それでも海老坂には〈戦争文化〉という言葉を使う理由があった。

ただ、私はこの〈戦争文化〉という言葉は保持したい。「戦争とともに、戦争の結果として生じた文化」の意味ではなく、「戦争の誘因となる文化、戦争を助長する文化」の意味において。この言葉自体を私が発見したのは、ほかならぬ加藤周一氏の著作においてである。

加藤氏がこの言葉を最初に用いたのは一九九〇年代になってからであるが、加藤氏の生涯と思想を考えて見て、その一つの大きな軸は、この意味における〈戦争文化〉への抵抗でなかったか、と私は考える。(海老坂武「〈戦争文化〉への抵抗をめぐる」2020)²⁰⁾

海老坂によると「戦争の誘因となる文化、戦争を助長する文化」の意味での〈戦争文化〉を発見したのは加藤周一においてであったようだ。海老坂は2015年にすでに、加藤周一が〈戦争文化〉という言葉をどのように用いたかを述べている。

本当に論ずべきは、戦争の誘因となる文化ではないか。したがって以下、私は〈戦争文化〉をこの意味に用いることにします。

実は、加藤周一も〈戦争文化〉という言葉がこの意味で使っていました。戦後世代に戦争責任はあるかないかを論じた講演『戦後を語る』（かもがわ出版、二〇〇九年）の中で、こう語っています。戦後に生まれた人間は日中戦争についても大東亜戦争についてももちろん直接の責任はない。しかし「戦争と戦争犯罪を生み出した諸々の条件の中で、社会的、文化的条件の一部は現在も存続している。その存続しているものに対しては責任がある」と。そしてこの「社会的、文化的条件」を加藤周一は〈戦争文化〉と呼ぶのです。

ただ講演という枠組みのせいでしょうか、それ以上は展開されていません。むしろ〈戦争文化〉を受け止める側の姿勢を問題としている。戦争文化は権力が押しつけてくるもの、権力の戦略であるとして、これを支える国民の意識的、無意識的な同意、順応、協力がなければ機能しない、したがってメディアをとおしての政府の大衆操作に国民が無抵抗であること、大勢順応主義であることが問題だ、と説いている。これはその通りでしょう。（海老坂武「いかにして〈戦争文化〉と闘うか」2015）²¹⁾

海老坂は、加藤の生涯と思想のひとつの大きな軸は、この意味における〈戦争文化〉への抵抗ではなかったか、と問いかける。このように「日本語の運命」は海老坂によって、〈戦争文化〉への抵抗という文脈のなかで論じられた²²⁾。さらに海老坂は敗戦直後の加藤の「激しい怒り」の対象が〈日本的なもの〉の中核に及ぶことを指摘する。中核とは、海老坂によれば、「制度としての天皇制」と「文化としての日本語」である。加藤による天皇制への批判は荒井作之助名義で発表した「天皇制を論ず」（1946年3月）である。日本語への批判は「日本語の運命」（1949年12月）において論じられる²³⁾。

「日本語の運命」の内容は第2章で詳しく見るが、その主張するところは漢字廃止論とローマ字のすすめである。学習に時間がかかり、音だけを聞く場合に、しばしばその意味内容がわからない漢字（表意文字）の廃止、そし

て「やまと言葉」と同じ表音文字であるローマ字の使用を勧める。海老坂は「日本語の運命」を評して以下のように述べる。

これは極めて性急な漢字廃止論である。たしかに漢字があるがゆえに日本語は不便であり、不正確である。しかしそれだけで漢字廃止を主張する十分な根拠となるだろうか。この性急さはどこからきたのか。時代背景はある。学校教育に直結して漢字制限の議論が活発になされていたし、志賀直哉でさえも「国語問題」という文章で、日本語をやめて「世界で一番美しい言語」のフランス語を採用せよと大真面目で説いていたということはある。

しかしそれ以上に、戦時中に四つ文字漢字（忠君愛国、一億一心、鬼畜米英、神国不滅）が大手を振って〈戦争文化〉を高揚していたことに対する強烈な反発があったのではないだろうか。

のちの加藤は日本語の素晴らしさを説き、中国、韓国と合わせて漢字文化圏を構想するようになる。次の一文はのちになって自分を笑っている文章として読むことができる。

「カンジをおぼえるには、テマがかかる。テマがかかることをミニマムにするのは、デモクラシーのプリンシプルである。そこでカンジセイゲン。もっとテッテイして、いっそカンジをやめてしまえば、コミュニケーションはスムーズになり、マイホーム、マイカントリー、マイトーキョーのナウなセンスがいきるだろう」²⁴⁾（「いかにして〈戦争文化〉と闘うか」²⁵⁾）。

海老坂は「日本語の運命」を「きわめて性急な漢字廃止論」としながらも、時代背景があることへの注意を促す。この時代背景とは、明治時代以来、議論されながらも戦後まで改革が進まなかった、いわゆる「国語国字問題」や、日本に民主主義を根付かせようとした戦後教育改革の原点である「アメリカ

教育使節団報告書」(1946)等が挙げられるだろう。また、海老坂の指摘で重要であるのは、加藤がこの論考を著した動機について、時代背景のみに求めるのではなく、戦時中の皇国プロパガンダに使用された四つ文字漢字への「強烈な反発」をあげていることである。

海老坂は最晩年の加藤の漢字文化圏の構想に触れ、漢字も英語も全てカタカナに変換した一文を紹介し、その後の加藤の歩んだ道を示すことも忘れない。海老坂の示唆する通り、加藤は亡くなるおよそ9ヶ月前に「漢字文化讃」という文章を残し、その中で漢字表記が東北アジアの信頼関係の発展に寄与する可能性に言及する。

現在活きている日本語の語彙の大きな部分は元中国産であるが、古代日本がそれを採り入れてから長い時が経った。それらの言葉は十分に「日本化」(発音、抑揚、意味、文法上の機能など)されていて、日常生活にその言葉が使用される度に外来語としての起源を意識する人は、おそらく極めて少ない。

日本語と同じ文字に出会う日本の読者は、その単語をそのまま日本語として読むだろう(音声、語順、追加を必要とする助辞など)。その意味で漢文の読み下しは、翻訳であると同時に翻訳でない。独特の翻訳事業であって、外国の書き言葉をそのまま読めるかのように扱う至便の工夫である。

かくして漢字表記は、日本国で千年以上、朝鮮半島でそれより長く、中国ではさらに長く続いて今日に至る。もし東北アジアの平和と繁栄を三国の統一へ向かう信頼関係の発展に求めるとすれば、そのための具体的な計画の一つとして、情報の流通の円滑化が考えられる。かつての筆談文化の活性化には、未来にとっての大きな役割があるかもしれない。(加藤周一「漢字文化讃」2008)²⁶⁾

上記の文章は、加藤が生涯の終わりに近づいた頃の漢字文化への考えである。49年の加藤からおよそ60年ほど経っている。戦後のGHQの政策による標準語の策定や、当用漢字の制定など、日本語をめぐる環境は大きく変化したということもあるだろう。敗戦後、日本語の教育の問題はそれまでの教育勅語に代表される軍国主義的教育を脱し、日本において民主主義的教育を実施するための重大な関心事だったのだ。それでは、敗戦直後の激しい怒りを抱えた加藤は、漢字文化をどのように批判したのだろうか。

第2章 「日本語の運命」をめぐる

1、「日本語の運命」

「日本語の運命」とは、加藤が1949年『展望』12月号²⁷⁾に発表した論考である。この号では目をひく企画として「講和の方向」と題された座談会が組まれ、単独講和か全面講和かが取り沙汰されていた。そのなかで加藤の「日本語の運命」は「日本語の問題」という特集のうちのひとつとして掲載された。この特集は加藤「日本語の運命」、三好達治「詩語の彷徨」、なかのしげはる「言葉のこと」の三本立てであり、掲載順もこの通りである。このうち三好達治「詩語の彷徨」はとくに、その少し前に発表された加藤の「『現代詩』第二芸術論」(1949年9月)²⁸⁾への反論として書かれる。加藤の「『現代詩』第二芸術論」という題名は、桑原武夫が敗戦後まもなく発表した挑発的論考「第二芸術—現代俳句について—」(1946)を念頭に置いていることが明らかである。桑原の「第二芸術—現代俳句について—」および「西洋近代小説の精神の洗礼」を説く『文学入門』(岩波書店、1950)については、以前拙論で触れた。この時期の加藤の日本語をめぐる主題として、マチネ・ポエティックと加藤の「『現代詩』第二芸術論」についての詳細は、次の機会に改めて論じることとし、本稿では「日本語の運命」をまず取り上げたい。

「日本語の運命」はそれに先立つ「『現代史』第二芸術論」で論じた詩の言

葉と日本語の問題を、日本語一般にまで広げた論考である。「現代詩」第二芸術論において、加藤は、今の日本で現代詩は成り立たないということを主張した²⁹⁾。「日本語の運命」がその議論の延長にあることを明示した上で、「単に詩人の力ではどうにもならぬ日本語そのものの性質によるであらうといふやうなことである」とし、「詩における言葉の問題は、言葉の美しさに係る。一般的な言葉の問題は、美しさに係るよりも前に、思想を傳へる道具としての便利さと正確さとに係る」と、詩における言葉の問題と一般的な言葉の問題を腑分けすることから始める。

加藤は、日本語は不便な言語である、と言う。なぜならヨーロッパ語の場合と比較にならぬほどの時間と労力を投じて多くの漢字を覚えなければならないからだ、そんなことを十分に行えるのは金と暇のある人間に限られている、日本語の文化は彼らに独占され、その結果日本の文化の性格は彼らに決定される、と加藤は述べる。文化が上位に独占されるという主張は同時に掲載された中野重治の論考にも見られる。しかし中野は、幸か不幸か、戦中の教育が識字率を高くしたと分析している³⁰⁾。

漢字交じりの日本語が学習するのに困難である、という課題は、十五年戦争中の植民地政策の一環として行われた外地の日本語教育を通して顕在化していた。イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識』(1996)では、外地での日本語教育について、内地における標準語としての日本語が存在しないために(標準語の策定はそれまでも議論されていたが進まず、敗戦後GHQのもとで行われた)、外地の官僚たちがどのような日本語を教えれば良いのか確信が持てず、かなり難儀していた様子がうかがえる³¹⁾。また、「漢字によってかれら〔植民地の人々〕をあらたに教育することが困難なこと」であるので「満蒙においては、一層すみやかに漢字の煩累から離れてなんらかの方法により教育の普及を図らなければならぬ」そのためには「日本語をできるだけ急速に普及せしめ、仮名を国字として知識の開発と文化の発展を期することがもつとも賢明な方法」だという、「国語改革」

の意志を持つ国語学者・保科孝一の意見が紹介される³²⁾。「漢字の「日本音」と「支那音」がはなはだしく隔たっているため、漢字使用民族のあいだでも正確な意志の疎通が妨げられている。それを避けるには、「漢字を捨てて仮名によつて教育を与えるが得策」だ」というのが当時の保科の意見である。実際に実現はしなかったが、「満州国」当局は、漢字を捨ててカナを国字にしようという企てがあったという³³⁾。またこのカナ国字論について、国語学者・服部四郎の「日本民族は、将来漢字を棄て表音文字（ローマ字・仮名等）を絶対に採る必要がある」「漢字が日本語そのものを壊している事実は著しいものである」、「日本語は表音文字を採用することによって始めて世界的言語となり得るであろう」³⁴⁾という意見をイが同書のなかで紹介しているのも興味深い。

「日本語の運命」に目を戻すと、加藤も表意文字である漢字の廃止とともに、表音文字（ローマ字）の採用を主張している。加藤がこのような主張をする背景には、総選挙による民主主義が、果たして日本でうまく機能するかどうかという懸念があった。加藤は、漢字を覚えるために途方もない時間が必要であり、そのために義務教育において基本的な精神訓練に十分な時間を割く事ができない、と言う。新聞を読む語学力のない日本人の大部分には、新聞を批判する批判力もない。そのような状況で選挙が行われ、絶対多数党ができあがると前置きし、こう続ける。

日本国民の大部分は選挙の前に自らの意見をつくりあげる資料をもたず、資料を判断する教養をもたず、従って自らの利益を自らの意見に正しく反映させることもできないのである。それでは、民主主義はなりたゝないであらうし、なりたゝせるためには、金と暇のある人間にしか利用することのできない日本語の文化を誰にも利用できるものにする事が、どうしても必要であらう。すなはち、漢字をやめるか、著しく制限する他にテはないので、之はほとんど自明の事がらだと思はれる。

(加藤周一「日本語の運命」³⁵⁾)

加藤は「漢字制限」と「新かなづかい」に触れ、「それなりに普及」しているが「実に不徹底な話で、不必要な漢語が盛んに用ひられてゐる」と述べ、漢字の廃止と同時に漢語文化からの脱却も提唱する。その理由として、加藤は日本語における漢語の不便さ、つまり「耳に聞いただけではわからぬ言葉」の横行を挙げる。そして漢字をやめ表音文字にするためには漢語の使用そのものをやめなければならない、と結論するのだ。

だが、加藤は漢語をできるだけ「やまと言葉」に代えることを勧める一方で、同時に「今日ほどわれわれが漢語を必要としているときにはないという事実」があることを指摘している。この部分に、当時の日本をめぐる加藤の一義的でない苦悩があらわれている。加藤は漢語が必要以上に用いられている現実を、「やまと言葉で必要な概念を表すことができないからでもある」と、「やまと言葉」の弱点を分析する。「やまと言葉」の抽象的単語の貧しさは、日本の歴史の始まりとともに、外来語によって補われる必要があった。

加藤は「そもそも漢語による概念の豊富化ということ抜きにして過去の日本文化を考えることさえもできない」と漢語の「輸入」の基礎の上に制度や思想、芸術や宗教の「輸入」があったことを踏まえながらも、今の日本語の不便さの理由として、インド・ヨーロッパ語を漢字によって翻訳する、といういわば二重の翻訳状態によって日本語があいまいになることを問題視していたのだ。加藤の論に従うなら、ヨーロッパ語は表音文字であるから、表音文字を表意文字、すなわち漢字によって翻訳し、その概念を表意文字である平仮名と混交して表現しているのが現代日本語である、ということになるだろう。ヨーロッパ語の急激な輸入に際して、漢字を通して西洋の思想を輸入したことが、日本語の混乱を招いた、ということのようだ。

漢語による概念の豊富化なしに成立し得なかった日本語の辿った「運命」をさして、加藤は「明治以後、インド・ヨーロッパ語の文化に接した日本の

文化は、さういふ條件、ほとんど運命と化した日本語のさういふ條件を負つてゐたのであり、ヨーロッパの概念を用ひる必要が大きくなれば、なるほど、やまと言葉ではそれらの概念を区別して表現することができないから、漢語の必要も大きくなつたのである」という。加藤が注目しているのは、明治以後の急速な近代化のなか、日本がヨーロッパ語の概念を輸入した時に起こった、漢字によるヨーロッパ語翻訳の問題でもあった。

加藤が後に「日本文化の雑種性」において、日本文化を「雑種」と呼称し、英仏型の文化と区別したのには、このように日本が急速な近代化の必要に迫られ、西洋の言語と概念とを積極的に取り入れたがゆえに、言葉の上でも大きな変化が起こったことも念頭にあったにちがいない。

「要するに、今の日本語の不便さは、主に漢語の多いといふことに係わつてゐるが、その漢語はほとんどすべてヨーロッパ語の翻訳であり、しかもそれらの概念は、われわれの生活と文化とに缺くことのできないものである。この不便さを克服するみちは、無論、漢語（漢字）の制限又は廃止の他にない」と1949年の加藤は「漢字の廃止」と「表音文字」の採用を主張する。

日本語は、むかしのシナ語が日本人によつてシナ人のとほりには發音されなかつたやうに、ヨーロッパ人の言葉は日本人によつてヨーロッパ人には通じないものとなるであらう。日本語が外國語になるのではなく、外國語からきた單語をとり入れて、變るのである。變り方は、おそらくひどいものにちがひない。キザでもあり、粗野であり、手のつけられない代物になるにちがひない。文學者は、そのなかからいくらかましなものをつくりあげるために、あるだけの力を傾ける他はないやうなものになるにちがひないが、それでも、わたくしは、漢字を廃止し、表音文字を採用し、その結果の一切をひきうけた方がよいと思ふ。日本國民が新聞をよみ、できればよんだ上で批判する能力をもち、批判した上で總選舉にのぞむことができるやうになる、そのことは、日本文學が失ふ

かもしれないあらゆる美しさよりも、金と暇とのある人間が獨占して来た漢語の文化の一切より、はるかに重大である。もしそのことをみとめるならば日本語を表意文字から解放する他はないし、現に、散發的に、無自覺に行はれてゐる解放を、計画的に、自覺的に押しすすめる他はない。(加藤「日本語の運命」³⁶⁾

加藤がこだわる発音と表音文字に関して、理解の助けになるのは、イ・ヨンスクが紹介する橋本進吉の仮名遣論である。

橋本は、日本語の本来の歴史的仮名遣いはヨーロッパ語の正書法とことなり、「単なる音を仮名で書く場合のきまりでなく、語を仮名で書く場合のきまりである」という〔引用註：橋本進吉「仮名遣いの本質」、日本国語会編『国語の尊厳』七八頁〕。「語を書く」というのは、同音の異なる語を書きわけるためのしくみということであり、音との対応は本質的ではないということである。それにたいして、「表音的仮名遣は、音を基準とし、音を写すを原則とするものであるとすれば、一種の表音記号と見てよい」〔引用註：同書、九四頁〕。したがって、「仮名遣〔歴史的仮名遣いのこと〕と表音的仮名遣とは互に相容れぬ別個の理念の上に立つ」〔引用註：同書、九九頁〕ということになる。(イ・ヨンスク『「国語」という思想』³⁷⁾

先に触れた保科博士は植民地運営の時代に、効率的な日本語普及のために、表音的仮名遣いによる学習を外地においてはもちろん、内地においても推進する立場であった。しかし内地の国語改革は保守派の国語学者や文学者からの攻撃にあったのだ。改革は遂げられないまま、敗戦を迎えたのである。イによれば、特に山田孝雄を筆頭とする国粋派の国語学者たちは、外国人教育のために日本語を改革しようとするのは国体にもとづく「国語」の神聖な

伝統に対する冒涇でしかない、と声を荒立てたという³⁸⁾。

このような戦中の日本の国語国字問題を踏まえると、加藤が現在の日本語の美しさと引き換えにでも、市民が批判能力を持ち、その上で総選挙に臨むことの方が重要であると説くことも、実現性は別として、その主旨を理解することはできる。1949年の時点で、漢字廃止とローマ字の導入を主張したのは加藤ひとりだけではない。しかし、日本語の美しさよりも批判能力を選ぶという立場を明確にしたことは、注目すべきである。加藤にとって、美はもはや最も重要な関心事ではなかった。この時期の加藤にとって最も重要だったのはおそらく民主主義の直輸入であっただろう。加藤が美よりも重視したことは「国体にもとづく「国語」の神聖な伝統」から日本国民を引き離すことであった。その意味で「日本語の運命」は「焼け跡の美学」の主題に近いものとして読むことができる。

だからこそ加藤は「日本語の運命」において、国語は論理的に正確でなければならぬ、日本語のあいまいさは、既に十分に利用された、と言う。

論理的には支離滅裂な文句が、言葉の暗示的な魅力によつて、多くの国民の心を捉へた。定義されないが、一種の雰囲気をもつた言葉が、意味ありげにつみかさねられ、論理的内容が空虚であるにも拘らず、思想の代りに、思想よりも有力なものとして、通用した。——その結果が、日本国民にとつて幸福なものであつたとは、どうして考へられない。(加藤「日本語の運命」)³⁹⁾

海老坂が指摘した、戦時中の皇国プロパガンダに使用された「四つ文字」漢字への「強烈な反発」は確かに加藤のうちにあった。それに敗戦後もこのような四つ文字漢字の使用に対する警戒を持っていたのは、加藤だけではなかった。渡辺一夫も、敗戦直後に戦中の「合言葉」としての四つ文字漢字の使われ方について痛烈な批判を加えているのだ。

2、渡辺一夫と川島武宜から見た「日本語」

渡辺一夫は敗戦の年の暮れ「思ひ出と希望（放送草稿）」（1945年12月）のなかで、「合言葉」としての「八紘一字」を批判する。

これは極めて遠い深い原因から生じた我々日本人の缺點であるが、我々は時の權威あるらしい人々から投げ興へられた一定の言葉を、面倒臭いから或はこはいから、無批判無反省に受取つて銘々勝手な都合の良い内容をよい加減につめこみ、事ある毎にこれを合言葉として派手に、私利の為に用ひる癖がある。思想と言葉との完全な分離、否思想の無い言葉の亂舞が文化面に現はれる傾向がある。古來の名言格言も哲人の訓戒も、無責任政治屋や似而非國士の壯語と同列に合言葉にされてしまった。〔…〕

嘗て、小兒病的なマルクス主義が流行した折、電車のなかで労働者風の人の足を過つて踏んだら、「痛え、貴様マルクスを知らねえか」とどなられた覚えがあるが、最近までは、「非國民」・「貴様は日本人か」と先にどなつたはうが喧嘩に勝つたといふ珍現象が度々見られた。「八紘一字」といふ古言が擔ぎ出されて一切のポスターにこれが掲げられ、世界何處へ行つても通ずる筈の標語とされてしまつたのに、日本人の誰に聞いてみても「八紘一字」の内容の説明は區々としてゐたし、況んや外國人にはてんで判らぬといふ珍現象も見られたのである。しかもポスターやラジオや演説で「八紘一字」といふ言葉が頻發されれば、戦意は高揚され舉國一致は完成され、絶対不敗の態勢はできあがることになつてゐたのである。（渡辺一夫「思ひ出と希望（放送草稿）」1945年12月）⁴⁰⁾

ここには「八紘一字」の意味を誰もよく説明ができないにもかかわらず、その言葉を発しさえすれば、直ちに了解されたようになる「合言葉」の機能

が端的に描かれている。渡辺は続けて、「八紘一字」にまつわるエピソードを記している。

戦争の最中、南方の留學生の會合があつた。その時留學生の代表が立つて「我々は八紘一字の精神でやります」と日本語を用ひて純眞な態度で挨拶したところが、主催者側の日本のお役人はげらげら笑つたといふ挿話をその會合に列席した人から聞いた。

この笑ひは、日本人特有の無意味な笑ひであつたことを祈る。そして、形式や表面だけを合言葉でうまく整へることに馴れた人々が、純眞な信念態度に對して感じたてれ臭さを自らごまかす為の笑ひでなかつたことを切に祈る。かういふ現象は單に大人ばかりに見られたことではなく、青少年に見られた。一切が軍隊式に遂行された結果、團體行動に於ける軍隊の一面に見られる美質は勿論青少年に現れた代りに、個人の消滅或は崩壊も生じたのである。それが當時の指導者によつて都合がよかつただけに、絶大なる聲援がこれに送られた。(渡辺「思ひ出と希望」)⁴¹⁾

これらの渡辺の、まだ戦中の記憶が生々しいエッセイをみると、加藤が四つ文字言葉の効用を警戒し、漢字廃止を訴えたことは、単なる西洋崇拜でなかつたことがわかる。「形式や表面だけを合言葉でうまく整へることに馴れた人々」に、「合言葉」ではない、思想と分離せず、思想と密接に結びついた言葉を用いなければならないと考えた若い加藤の心情も理解することができる。「リルケが流行したのではなく、徹底的に誤解されたリルケが、翻訳を通して、合言葉となつたのである」⁴²⁾と「新しき星董派に就て」(1946)のなかで加藤は述べた。加藤と渡辺の立場は非常に近かつたと言えるのではないか。

さらに日本語の問題について、加藤の「日本語の運命」に先立つ1948年11月号の『思想の科学』に座談会「聞いてわかる学問言葉を作る会」が掲載

されていたことにも注意したい。この座談会には川島武宜も出席していたが、その発言は加藤が「日本語の運命」に展開する主張と大きな隔たりがない。この座談会において川島は、日本語は聞いて判らない、それをやはり漢字の問題があると持論を展開する。川島は「語彙」という言葉を例に出し、耳に入ったときにさっと判るかどうかを問題にする。漢字は日本語では「見る」言葉であり、「聞く」場合は不自然なものがある、というのだ。また一方で大和言葉は科学用語として精密さという点では難しいとする。大和言葉で不便なものは使う必要がないが、従来なかった大和言葉でもそれにいろいろな意味を持たせて豊富なものにして行くことはできる、というのが川島の主張である⁴³⁾。加藤が「日本語の運命」において指摘した、漢字は聞くだけでは意味内容がわからないという点、また大和言葉の弱点——川島は科学用語として精密さに欠けるといい、加藤は抽象的な単語の貧しさと表現した——、この点を川島は『思想の科学』座談会ですでに指摘していたのだ。

そして川島はこの座談会の終盤で、同席していたCI&E 職員のハルパーン⁴⁴⁾にある「お願い」をする。

この問題〔国語改良〕は実は前から気にしていたんです。ところがそれではどうしたら〔日本語が〕聞いてわかるかというが無茶のようですがそれには先づ假名文字か若しくはローマ字になつてしまわなければ出来ないとします。漢字を使っている限り見る言葉ということはやめられない。ローマ字が假名にしてしまえば此処で宮城さんがお書きになつた恐怖という言葉が聞いて判るか判らないかというのも自ら解決します。ところが私かねがねローマナイゼーションを希望しているが日本のガヴァメントではそれが出来ない。これはハルパーンさんの方から日本のガヴァメントに封してプレツチャーを加えて頂きたい。それでない限りは結局議論に終るとします。(川島武宜発言、座談会「聞いてわかる学問言葉を作る会」、1948)⁴⁵⁾

川島のこの発言に対しては、同席していた大久保忠利から直ちに「ちょっと申しますが、それは東條式です」ともっともな反論が加えられる。それに対して宮城音弥は「いいえ、日本の民主主義革命が行われたのと同様に、外の力が必要です。もしそんな力を否定すれば、この民主主義をすつかり、やり直して人々の教育がある程度に完成して、初めてファシズムの瓦解が可能です」と返答をしている。

このように、敗戦直後の日本語をめぐる問題は、今日からは想像がつかないほど、民主主義の「革命」と結びつき、戦中のファシズムの記憶が色濃い中で議論されていたのである。加藤の「日本語の運命」はこのような文脈において書かれた。加藤の主張は急進的な漢字廃止論であったが、川島の例のように、けっして加藤独自のものではなかった。

もう少し付言すると、加藤の主張には「アメリカ教育使節団報告書」の影響が見てとれる。講談社学術文庫の紹介によると、その狙いは「この昭和21年、合衆国対日教育使節団がマッカーサー司令部に提出した報告書は、臣民教育を否定し、国家中央当局への権力の集中を批判して、戦争で荒廃した日本に民主主義教育を打ち樹てようとした戦後教育改革の原典である」ということである。曰く「ローマ字は民主主義的市民精神と国際的理解の成長に大いに役立つであろう」「いまこそ、国語改革のこの記念すべき第一歩を踏み出す絶好の好機である」「日本人は、国内生活においても、また国際的思考においても、簡単で能率的な文字による伝達方法を必要とするような新しい方向に向かって進み出している」「ローマ字の採用は、国境を超えた知識や思想の伝達のために大きな貢献をすることになるであろう」。

このように見ると、外地で日本語の普及を目指した日本の高官の言説とそう違わないように思えるが、川島、宮城の発言のように、当時の日本の知識人には、それよりも日本語を整備することの方が重大な任務であると思われたようだ。裏を返せば、それほど日本の民主化のための準備が不足しているという焦燥感があったのだらう。加藤が「日本語の運命」を執筆した理由も、

この焦燥感を共有する一人であったからだと言える。

3、言葉と加藤周一

これまで見てきたように、加藤は「日本語の運命」において漢字廃止を主張した。しかし加藤が批判していたのは「漢字」そのものだろうか。

この時期の加藤は、漢字に限らず、「あいまい」な言葉や表現に対して痛烈な批判を加えていた。「日本語の運命」が発表された時期の日記「Journal Intime 1948 1949」にはあいまいな表現や言い回しへの苛立ちが述べられている。

Décembre 1949

1/ XII—

三島由紀夫

数年ぶりで彼に会ふ。白井、中村光夫、野間、小田切、椎名氏同席。流行作家といふものは、その小説よりもみておもしろく、きいておもしろし⁴⁶⁾

—ぼくの小説はちっとも賣れませんが、といふ。

だから讀者の水準が低下してゐるといふ話なり。

椎名氏にむかって、その近作“その日まで”の作者は“こっけいに見える”といふ。づけづけしたもの云ひ方。わづかばかり有名になって、三島さんは小説がうまいよなど、云はれて、その結果他人に対する言葉づかひがぞんざいになる男の方が、よほどこっけいなり。

小説は異質なまねにすぎず。その他になんにもない。

—ぼくはメカニズムといふことを考へてゐるんです

中村光夫氏曰く

—メカニズムってなんですか

—モラリストの描いたやうな人間関係。ラディゲの“ドルジェル伯”

とか、“危険な関係”でも、マッコルランの…

そこで又何のことだかわからなくなる。

—ぼくはリラダンの短篇を一番学んでゐるんです

Radiguet – LeSage – MacOrlan – L'IsleAdam 彼らの前提として
ゐるものは全くちがふが、どういふ point of view が彼らを一括できる
のかわからない。たしかに共通のものがある。しかし、それはフラン
ス人だといふことにすぎない。

—Physique (physic) な自我から出発すると彼はいふ。

なんのことかわからぬ。わからぬといふと、それがわかれば文学か
わかってしまふ、わからない人間のなかの X だといふ。いい気なもの
だ。

人間がわからぬといふ話ではなく、余り舌足らずな表現が他人には
通じないといふ話をしてゐるのだ。

どうもいゝ気なものである。或はこっけいなものである。

警句をいひたがるが、いひすぎて意味が通じない。

よく知りもしない“リシュリーの時代”の話などをするが、まちがっ
てゐる。

虚栄心が人を害ふ。少しばかりの名声とはした金とが人を害ふ。

それで本人は Journalism がよろしくないなどといつてゐる。
Journalism が害したのではなく、彼の方が害はれたのだ。

☆

批評のなれあひについて

同時代人に対する批評は、いつもなれあひである。Sainte – Beuve に Mes
Poisons のある理由なり。しかしわが国のなれあひの仕方は独特だ。
わが国の生活の苦しさが獨特だからである。（「Journal Intime 1948
1949」）

加藤はこの日記において三島の「メカニズム」という言葉や「Physique (physic) な自我から出発する」などの言い回しを批判し「なんのこともわからぬ」という感想を繰り返す。漢字を廃しローマ字を勧める「日本語の運命」を発表したのと同時に、加藤はヨーロッパ語の、いわば四つ文字漢字的使用方法に対して、苦々しく思っていたことがこの日記からうかがえる。

それからほどなくして、加藤は「鷗外と洋学——外国文学理論の移植について」(1950年3月)を発表する。この論考は「日本語の運命」(1949年12月発表)で加藤がかなり挑発的に日本語に投げかけた問いと、表裏一体であったのではないか。つまり、「洋学の盛衰を論ず」(1902)において鷗外の話った言葉「果実の輸入ではなく、種子の輸入」に象徴されるように、言葉と同時に概念や体系を理解しなければ、外来語を自らの言葉として使うことができないという考え方である。

丸山との対談をもとにした『翻訳と日本の近代』は、若き日の加藤の問題意識と無関係でないだろう。江戸時代日本語を多くの言語のうちの一つとして捉えることのできた徂徠について「革命」という言葉で表現する加藤に丸山も同調している(31-32頁)。『日本文学史序説』にも触れられているが、加藤は徂徠を詩人として捉える。言葉への執着が徂徠を導いたともとれる加藤の書き方には、マチネ・ポエティクから出発した加藤を重ねて見ることもできる。

これらのことを考え合わせると、海老坂が引いた1975年の加藤の一文「カンジをおぼえるには、テマがかかる。テマがかかることをミニマムにするのは、デモクラシーのプリンシプルである。そこでカンジセイゲン。もっとテッテイして、いっそカンジをやめてしまえば、コミュニケーションはスムーズになり、マイホーム、マイカントリー、マイトーキョーのナウなセンスがいきるだろう」⁴⁷⁾、これが、英語と漢字を全てカタカナで記した意図も了解できる。これら二つは外来の言葉であり、「やまと言葉」だけで文章を拵えようとすることはもはや不可能である。また、漢字という表意文字を表

音文字に置き換えると、余計になんのことだかわからなくなる。「国語国字問題」から、敗戦後の国語改革を鑑みると、日本語とは、表音文字と表意文字の「雑種文化」であったということではないだろうか。だからこそ加藤は「日本文化の雑種性」において、日本文化の純粹化運動の、純粹な日本化も、純粹な西洋化も、二つながらに否定しなければならなかったのである。

第3章 言葉と政治と「日本文化の雑種性」

1、もう一つの背景としての斎藤茂吉

敗戦後、加藤が『万葉集』をも含む日本文化をも批判したことは先述した。『万葉集』に親しんだ加藤の『万葉集』批判や、「日本語の運命」に見られる言葉の美しさよりも、日本国民の批判能力の向上をとるという加藤の選択には、何が影響を及ぼしているのだろうか。

加藤は痛烈に戦時中の詩を非難することが、しばしばあった。しかし、加藤が敗戦直後にその鋭い批判を向けなかった歌人が、斎藤茂吉である。1950年の日記には、茂吉のことを綴っている。

Journal intime 1950 1月1日

新聞をみる。朝日。MacArtherの寫眞と声明とあり。そこの所が戦前とちがふ。天皇が太った皇后と一緒にゐる寫眞もあり。そいつが一面になくて、三面にある所が戦前とちがひ、とにかくそういふ寫眞が大きく出て低能な記事のついてゐる所は戦前と同じ。齊藤茂吉⁴⁸⁾と高浜虚子⁴⁹⁾との歌と俳句とあり、少しもおもしろくないのは、全く戦前と同じことである。

久子にあて、手紙を書く。おやぢさんの就職のことなど。

Sartre⁵⁰⁾をよむ仕事。

1年の計畫をたてる。“抵抗の文学”“フランス文学論”⁵¹⁾“美しい日

本”“木下杢太郎傳”⁵²⁾等。

サルトル、抵抗の文学、フランス文学論はフランス文学ないし哲学に関わる仕事だが、美しい日本、木下杢太郎伝は日本の仕事である。この日記において加藤は斎藤茂吉の歌を「少しも面白くないのは、全く戦前と同じこと」と切って捨てるが、戦前のノート『青春ノート』でインターン先の候補として茂吉が院長を務める青山脳病院を訪れた時、茂吉は加藤にとって、憧れ尊敬する詩人だったのだ。

加藤にとって、茂吉は特別な歌人であった。青春ノートに記された日記は歌人茂吉に対する賛辞が書かれる。晩年に発表した「斎藤茂吉の世界」(1993)執筆のためにとったと思しき「斎藤茂吉 1882-1953」ノート⁵³⁾の「地方と都会」左上には「加藤信一 私自身の印象 1941～1942」と父の名が記されていた。しかし、加藤が茂吉のノートに父の名を書いたのは、単に斎藤茂吉が父の医学生時代の同級生であったからというだけでないだろう。都会の出身ではなく、医学部に籍をおいた二人は、天皇に対しても否定的でなかった。殊に茂吉は、天皇を賛美する歌も詠んでいる。

加藤がインターン先の候補として茂吉が院長を務める青山脳病院を父の紹介で訪れるエピソードは、青春ノートの日記に綴られ、「斎藤茂吉の世界」以降、繰り返し語られる。加藤は「私は私の印象から始める」と書く。加藤が茂吉にはじめて出会ったのは1939年秋のことであった。茂吉との出会いを、加藤は興奮気味に日記に書き残している。

Dr.Saitoh〔斎藤茂吉〕は白い仕事着を着て、暗らい廊下の奥から走るように出てくると、私に近づきながら早口に云つた、“君が加藤君の坊ちゃんか？”はあそうです” “ああそうか、ま、あがり給え”それから又先にたって走るように歩き出した。〔…〕

又仕事着の斎藤博士は絶えず、私に話しかけ、忙しいので、副院長に私

の案内を頼むからと云うことで、あわただしく挨拶をするまで、私に喋るひまをあたえなかった。“君は医者かね、あ、医者になるのかね。”ええそのつもりです。“あそうかそうかそれでいい”

——私はちっともそれでいいことはないと思つたが、“内科だろうがね。”と云う次の言葉で私は今病院を参観に来ている、それは医者としての将来の参考のためであると言ふことを、想出した。想出したけれども、人は考えてもいなかったことを想出すと云うことがあるものだ。勿論私はそんなことを考えていたのではない。私は青山脳病院長よりは万葉集評釈の著者に会いたいと思つて来たのだ。病院長の眼に映った狂人よりも、狂人のほほ漂ふ長廊下、まなこみひらき我はあゆめる。の歌人の眼に映じた狂人たちが見たかったのだ。しかしそれはむしろ浅パクな考えであつたかも知れない、と私は考えた。加藤君は大きな坊ちゃんがあつていいなあと私の眼をのぞきこんだ老眼鏡の奥の眼、一懐かしそうな深かい眼を知ったとき、私は私の考えが浅パクであつたことに気がついた。その眼は医学博士としての眼でもなければ、大歌人としての眼でもない、平凡なしかしそれが故に却って偉大な、不幸な家庭人の回想的な眼であつた。私は今にして思うのである、大歌人の眼とは常にあの平凡さを失わぬ眼に他らぬと。(加藤周一「青山脳病院」1939)⁵⁴⁾

その後、加藤が戦中の茂吉の歌の卑劣さや愚劣さを指摘するまでに長い時間を要した。太平洋戦争を挟む加藤の二つの日記では、茂吉への評価が正反対であることはもちろんであるが、戦後の日記においては、戦前に茂吉に傾倒していた事実を無視するかのような書き振りである。

また忘れてはならないのは、青年加藤が「万葉集評釈の著者」と表現するように、茂吉がすぐれた歌人であつたと同時に、茂吉による『万葉集』の解説『万葉秀歌』上下(岩波書店、1938)がひろく読まれていたということである。ことに茂吉は柿本人麻呂にのめりこみ、「村や町の役場を訪れ、土地

台帳を調べたり、人と会って話を聞いたりして」人麻呂の足跡を地道に調査したという⁵⁵⁾。加藤もこの茂吉の調査について「従来の文献が解決していた問題を「実地の踏検」によって解決しようとしたのが、著者みずから「些か力を致した」として誇るところである」と「斎藤茂吉の世界」において触れる⁵⁶⁾。

加藤が『日本文学史序説』を執筆した際、柿本人麻呂を加藤も評価している。加藤の人麻呂評価に対して茂吉がどれほどの影響を与えたかは、今後詳しく精査されるべきである。だが、若き日の加藤にとって、茂吉と『万葉集』は日本文学史の連綿と続く一筋の流れの中で、強く結びついていると感じられたのではないだろうか。

中村真一郎の戦中・戦後の『万葉集』に対する態度に比すると、加藤の戦後の『万葉集』にまで至る日本文化批判はかなり激しいものを感じられる。このことは戦中の『万葉集』への歪められた理解、また「合言葉」への拒否反応とともに、戦前、茂吉へ傾倒していたことも大きかった可能性も考えられる。

加藤は、「斎藤茂吉の世界」において医師としての茂吉と、歌人としての茂吉を比較する。そして歌人としての茂吉に「科学的」態度の欠けることを指摘するのである。その点において、茂吉は鷗外・杳太郎とは対照的に科学的思考の特定領域の閉じ込めがあったのである。この場合の例外は茂吉でなく、鷗外・杳太郎である。

加藤は敗戦後、その急進的な批評によって少なくない詩人や文学者を批判した。しかし斎藤茂吉のすぐれた歌と愚劣な歌について加藤が書くのは「斎藤茂吉の世界」(1993)を待たねばならなかった。茂吉を書くために、加藤は敗戦からほとんど半世紀近くの年月を必要とした。

そして、「斎藤茂吉の世界」や「鷗外・茂吉・杳太郎」、未完成に終わった「短い前がき」においても、必ず加藤は実際に相対した、病院の玄関まで迎えてくれた茂吉の温かさを書くことを忘れなかった。

2、加藤周一にとっての1949年①——母の死

これまで、敗戦後の加藤における「日本的なるものへの呪詛」や、それに連なる側面を見てきたが、加藤にとって、「日本語の運命」を発表した1949年はどのような時期だったのだろうか。その手がかりのひとつとして、加藤が1948年から渡仏の直前まで書き残した日記が立命館大学加藤周一文庫に収められている。二冊の冊子型ノート「Journal Intime 1948 1949」「Journal Intime 1950 1951」である。

加藤の作品年表からは、1949年は年初から小説『ある晴れた日に』の連載を開始し、フランス文学を主題とする寄稿や、血液学に関する執筆、さらに「芥川龍之介小論」や、二本の木下空太郎論を書くなど、加藤にとって、晩年まで取り組むことになる主題にも取り掛かった充実した一年であるように見える。しかし一方で、49年は母に胃癌が見つかり、闘病の末亡くなった非常に辛い年でもあった。母の他界によって加藤は「無条件の愛の中心」を失い、その前後で自分の生涯をわけて考えるほど世界が一変したのだ。母がなくなった49年5月30日の日記には、母が生前書いた手紙が貼り付けられ、フランス語で淡々と母の死と呼吸困難の苦しみを綴り、十字架を書いた筆跡には、深い悲しみが滲む⁵⁷⁾。その後、日記は年の瀬の12月30日、31日まで書かれない。31日の日記には、9月の「『現代詩』第二芸術論」発表を経て、「日本語の運命」が掲載された12月頃の加藤の心境が綴られている。

Décembre 31 samedi

あや子⁵⁸⁾と銀座へ買物に行く。シャツ一枚627円、放出Peanutsカンヅメ180円等。7時頃歸る。停電。立石姉弟⁵⁹⁾来る。年越しを共にする。

田村宏 Hysteria をおこす。頭が痛いからしづかにしてくれといふ。10.30 p.m. この男、ものゝ云ひ方が横柄で、思ひ上つた様子、三島によく似てゐる。若い男を、女ならなはさらだらうが、チャホヤして、金を

やると、ろくな効果を生じないやうである。

今年、家に病人あり。母死に、その後であや子病む。療養したが、来年はもう少しましになるだらうと思ふ。

Journalism は戦後派衰退の年といふのが定説。来年はいくらか復活し、風俗派（舟橋・丹羽）、戦前の芸術派（阿部知二等）と共に、ろくでもない小説を製造することであらう。こゝでくらすのもろくなことでない。下山事件、三鷹事件、大學教授の red mark 事件（イールズ声明、南原声明）単独講和のうわさ話等のことあり。

国際的には中共の勝利。12月インド之を承認。（ソヴィエットはその前に承認）

文中の三島とは三島由紀夫のことである。この前日の日記には、座談会で会った三島の印象が書かれていたことは先述した。三島に対する激しい批判の調子が見てとれ、その尖った神経のありようは「日本語の運命」から受ける印象と近い。

1949年の前半、加藤が母の看病と医局の仕事に奔走したことは当時の妻、綾子氏が書き残している⁶⁰。『続羊の歌』にはその時を回想し「私は精魂を費い果した」と書く。家族が交代で母の病室を訪れていたようだが、医者である加藤の負担は大きかったのだろう。また、「母死に、その後であや子病む」と大晦日の日記に書かれていることから、母亡きあと加藤がひとりで苦境に耐えたことがうかがえる。小説として書かれた自伝であるが、『続羊の歌』からはこの時期の加藤の疲弊した様子が伝わってくる。

母が死んだとき、私は自分の内側が空虚になったように感じた。よろこびも悲しみも感ぜず、ただ全身に広がる疲れだけを感じ、しばらく放心していた。葬式をほとんど覚えていないのは、周囲に起こる何事にも関心を失っていたからだらう。まもなく本郷の病院へ通って仕事をつづ

けていたにちがいないが、その記憶も、はっきりしない。はっきりした記憶は、夜ひとりになると、その顔や、その言葉が、秩序なく甦り、そのすべてを失ったということ、そのすべてがかえらぬということが、実に堪え難く感じられたということだけである。私の世界からは、無限の愛情の中心が消えてなくなり、世界はもはや私にとってどうなってもよいものにすぎなくなった。毎日見慣れたどぶ川のほとりの景色は、真昼の白い光のなかで急に色を失い、どこか見知らぬ土地の私とは何の関係もない町の景色のようにみえた。私の内部には過去があり、それこそは現実であって、外部には夢があるにすぎなかった。

しかしときが経つにつれて、私は母の死をも落ち着いて考えることができるようになった。[…] 私はまた同時に、私自身の生涯を、母の死を境として、その前後に別けて考えるようにもなったのである。その前と後とで、私の生きてきた世界のいわば重心が変わった——ということに気がついたときに、その考えは私自身をおどろかせた。それまで私が母に頼って生きていたのではなく、むしろ母が私に頼って生きていたのだからである。しかし母を失ってしばらく経って後、私は無条件の信頼と愛情のありえた世界から、そういうものの二度とありえないだろうもう一つの世界へ自分が移ったことをはっきりと感じた。信頼はあらためて作り出し、愛情はあらためて探し求めなければならない。京都の女は、その事実を少しも変えるものではなかった。(『続羊の歌』「京都の庭」初出1967年)⁶¹⁾

興味深いことに、『続羊の歌』において母の死という重大な出来事を描いたこの章の題名は「京都の庭」である。このことはおそらく1949年の執筆活動と関連している。

また「京都の庭」は、1) 京都の女と京都の庭、2) フランス留学の試験、3) 母の死、4) 留学の決意が語られているが、実際の時系列とは異なると思

われる。京都の庭を見て回り、母が亡くなったのは49年の出来事だが、驚異力によると、加藤がフランス政府給費留学生試験を受験したのは1951年だそうだ⁶²⁾。

3、加藤周一にとっての1949年②——京都の庭

加藤周一と庭というと、多くの読者が真っ先に思い浮かべるのは1950年2月に発表された「日本の庭」であろう。これまで「日本の庭」は渡仏前の加藤の執筆した論考のなかでも、のちの日本論へつながる重要な論考とみなされている。しかし、京都の庭を見てまわったことについて、加藤は、49年5月に発表した「何が美しいかといふこと——庭とブギヴギとについて」⁶³⁾のなかですでに触れていた。

わたくしは、ちかごろ用事があつて、京都へ行きました。〔…〕〔二つの都会の〕その對比は、汽車が天津をとほつて京都へちかづくとき、窓外の風景にもすでにあらはれはじめるので、一言でいへば、東京から京都へゆくといふことが、何處か日本ならぬ所から日本へ歸るかのやうに感じられるのです。〔…〕東京には西洋風の文化と日本風の文化とが複雑なかたちで混りあつてゐるのに反し、京都には日本風の文化ではなく、純粹に日本的な文化のあることが、その郊外の風景のなかにも直観される。戦争以後、江戸の文化は影もかたちもなく消え失せましたが、京都には多くの古い建物があり、われわれの文學史的想出からきりはなすことのできない多くの山や川があり、又何よりも風俗や習慣や人々の趣味の上に古い文化の生みだしたもろもろのかたちが今も明かにのこつてゐます。京都では、日本映畫の畫面のなかにはあらはれるやうに、又銀座街頭にみられるやうに、堀立小屋のならんだ街をあるくアメリカ風の女たちよりも、もうすこしちぐはぐでない美しさをみつけることができます。〔…〕とにかくこのように身につかないものが美しく感じられ

ることはないだらうと思ひます。ところが京都には、身についたものがあり、確かに美しいものがある。そこに住む人々、その衣裳、その言葉、その動作ばかりではなく、しづかな街のくすんでおちついた色も、その街の上に擴る花曇りの灰色の空も、又その空を劃する山々と寺院の屋根の曲線も。わたくしは、それらのものゝなかに日本の、今はその他の所にはない日本に個有の美しさを感じましたが、そのやうな美しさは、ある日、知人の心理學者と二人で訪れた禪寺の庭にもつとも深く、もつともはつきりとした形であらはれてゐたやうに思ひます。わたくしたちは氣まゝな散歩をしながら、ハイデッガーの話をしてゐた、東京でならばサルトルの話をするときに。わたくしはそのことにも東京と京都とのちがひを感じたのですが、それは餘談です。とにかく、散歩の氣まぐれにあまり有名でない庭にたちよつたわたくしたちは、その庭の美しさをとほして、嘗て築え、いまでもその跡を京都にとどめてゐる一つの文化、おそらく日本にあつた最高の文化の構造を、想像しました……（加藤周一「何が美しいかといふこと——庭とブギヴギとについて」1949年5月）⁶⁴

文中に登場する「知人の心理學者」とは、鷲巢力によれば、妻・綾子の兄である。翌年1950年2月に発表した「日本の庭」にも、「知人の心理學者」が登場する。「何が美しいかといふこと」の旅行と、「日本の庭」は同じ経験に基づいているのかもしれないし、あるいは複数の旅に綾子の兄が同道したのかもしれない。鷲巢は京都の庭と加藤、綾子の兄について以下のように述べる。

加藤が京都の庭に興味を抱いたきっかけは何だったのか。その理由について、『羊の歌』にもそれ以外でも明らかにしていない。「ひとりで京都の町を歩き、折りにふれて古寺を訪ねることをいつしか慣しとするようになった」（『羊の歌』三五頁、改四〇頁）と加藤はいう。ところが、

最初に結婚した綾子の実弟中西勉（一九二九年生まれ）は、「兄は関西の大学の教職にあって、京都に住んでいましたが、周一氏を京都の庭に案内して歩き、庭についての議論を交わしていました」と語った。この「兄」を中西昇（1911-1961）といい、京都帝国大学心理学科を卒業した心理学者で、一九四〇年代には龍谷大学助教授を務め、京都北白川に住まいした。もちろん、加藤がひとりで京都の庭を廻ったこともあったろうが、中西昇と一緒に庭巡りをしたこともあったのだろう。そのうち京都の庭を主題として「日本の庭」（『文藝』一九五〇年二月号、『自選集1』所収）を著わしたが、そのとき「To Professor N.Nakanishi」という献辞を付けた。しかし、同著作が収録された『美しい日本』（角川書店、一九五一）には初出誌にあった献辞がなくなり、その代わりに「あとがき」に中西昇の名前を挙げて謝辞が記される。その後の論集には同著作が収録されて、中西昇には触れられなかった。（鷺巢力『いかにして』2018）⁶⁵⁾

「何が美しいかといふこと」は、「日本の庭」に通ずる内容であるが、同時に『万葉集』批判からそれほど時を経ずして、「純粋に日本的な文化」として京都の庭を描いていることは、「日本文化の雑種性」への重要な布石ではないだろうか。

「何が美しいかといふこと」は東京と京都を比較する。東京の文化を「西洋風の文化と日本風の文化とが複雑なかたちで混りあつてゐる」とし、京都の文化を「日本風の文化ではなく、純粋に日本的な文化」と評していることに注目したい。東京と京都の文化に対する加藤の評価は、55年の「日本文化の雑種性」において、日本文化を雑種として日本と西洋が分かち難く混じり合っていることを指摘することを彷彿とさせる。混じり合った文化と、純粋な文化という構造、とりわけ東京に対する、混交している文化だという感覚は、この時から加藤にあったのだ。加藤にとって東京の文化は、純粋な日本

文化でも、純粹な西洋文化でもない、あくまで「日本風の文化」と「西洋風の文化」が複雑に混じり合っている中途半端なものとして映っていた。さればこそ、この年の暮れに「日本語の運命」を執筆したとき、加藤なりの「日本文化の純粹化」を論じたのだらう。しかし留学を経て帰国後、「日本文化の雑種性」を著したとき、この複雑に混じり合った日本文化の「雑種性」は、日本の小さな希望に転換されるのだ。

また「何が美しいかといふこと」で加藤は「純粹な日本的文化」として「京都の庭」を評価する一方で、フランスの庭と日本の庭を対比させ、ベルグソン『道徳と宗教の二源泉』における閉ざされた社会と開かれた社会を引き合いに出し、部分と全体との質的な違いを越えることの重要性を強調し、それに似た意味で「日本の庭は閉じられている」という。

しかし、庭は一切を含む世界であり、しかも閉ざされた世界です。その世界の支配者であるべき主人公も、庭を見るかぎり、庭のなかにあり、庭につままれ、庭の外へ出ることはできません。庭を見る人は、本質的に、庭に對してあるのではなく、庭のなかにあるのです。彼は、庭に、或は庭である自然に、捉へられ、閉じこめられ、その意味で、支配される。ほんたうの支配者は、主人公ではたくて、庭です。庭に對してあり得たのは、庭に對して庭をほんたうに支配し、自由な精神であり得たのは、庭をつくつた藝術家、己のつくつたものを二度と見るができなかつたかもしれない藝術家だけです。彼らは、さういふものをつくることによつて、〔ママ〕彼らの支配者たちに復讐したのでせう。自然に従ひながら自然を支配する、——もう一つの自然をつくることほど完全な自然の支配はありませんから、敢へて支配するといひますが、さういふ仕事は、どちらも封建的支配者に従ひながらとどのつまり彼らを支配するといふ藝術家の生き方に關係がありさうです。西行は、宮廷で禿頭を叩いてみせたかもしれません。しかし、彼は己の歌が宮廷の全體よりも長

く生きのびることを知つてゐたにちがひない。同じことは、今も京都に残つてゐる多くの庭をつくつた多くの美術家についてもいへることだらうと思ひます。〔…〕わたくしたち、知人の心理者とわたくしとは、たまたまたち寄つた禅寺の庭に、日本の美しさの典型をみました。しかし、わたくしたちにとつて必要なのは、閉された庭のなかにある美しさではなく、その美しさをつくりだした精神の自由だといふことも考へました。庭の美しさは、その美しさをとほして、ブルーノー・タウトのやうに、庭をつくりだした「考へる視線」を想像することのできる人にとつてのみ意味があるので、昔の主人たちのやうに、庭のなかに閉じこめられてゐる、或は閉じこめられてさへゐない今日の主人たちにもにとつて意味があるわけではありません。(前掲「何が美しいかといふこと」)⁶⁶⁾

上記のように、加藤は日本の庭を閉ざされていると考え、閉ざされた庭の構想を立て、「考へる視線」を持つタウトのような芸術家が、精神の自由を持ち、時代を超えていけるのだとする。注意したいのは、日本の庭の美の再評価が、日本の伝統的視線のなかからは生まれず、外からの視線によってなされたということである。加藤はこの文章の最後を、「時代的であり、同時に時代を超えるものであれとわたくしは、わたくし自身に向つていひます。眞に時代的でないものが、時代を超えたことは、ありませんでした……。」⁶⁷⁾という一文で締めくくる。

このように、東京の文化を純粹でない不完全なものとして描写し、なおかつ、庭という枠組みの中に立つのではなく、外から眺める視線の必要性を解く加藤の筆致は、のちの『日本文学史序説』において幕藩体制の枠組みを超える言説の有無を問題にする加藤の、樋口の言葉を借りるならば、「点景」と言えるだろう。

さらに「何が美しいかといふこと」において、加藤が失われた文化として江戸文化について触れることも見逃してはならない。「戦争以後、江戸の文

化は影もかたちもなく消え失せましたが、京都には多くの古い建物があり、われわれの文學史的想出からきりはなすことのできない多くの山や川が」⁶⁸⁾ある、と加藤はいう。この部分に、空襲によって街を焼き払われた東京の人々の、「失郷」に近い感情がよく現れている。加藤は太平洋戦争開戦の直前に、すでに「東京」が失われることを予感し、『青春ノート』にその時の心情を書き残している。

東京を我々は失うかも知れない。——と云うと大抵の人々は感慨に耽けるであろう。そして本当に東京を失ったときには、もう感慨所ではなく当惑するであろう。そしてまもなく代用品を発見するだろう。代用品を発見するにきまっているのだ。我々にとって代用品の発見出来ないものは、我々自身だけである。つまり絶望などはせいぜい飾りにすぎず、信用だけがそこでは通用するのである。それを自我と云う。自我とは信用である。

しかし我々はあそびなければならない。我々はさようなら東京！と云う身振りを場合によってはしなければならぬ。しかしその身振りは、我々のあそびは、何と云う悲しい遊びであろう！我々のあそびは多少とも悲しいのである。故郷、希望、虚栄心！浅草に行って見給え、踊り子たちは法律が長くしたパンツをはいて、役人の云いそうな建設的言葉（！）を絶叫している。銀座に行って見給え。アメリカ映画そっくりの男女が、豆のコーヒーをのみながら、愛国公債のポスターを眺めている。そして最後に新刊書を、本屋の店頭で、手当たり次第に翻して見給え。文学者は政治を、哲学者は歴史を語っている、科学振興、実は工業振興の必要に、有頂天になった科学者は、十八世紀の匂いのする古色蒼然としたオプティミズムを掲げて、やにさがっている。何と云う愚かな、何と云う悲しい光景であろう！我々は、東京の中に東京を探していた或る小説家が、墨東までおちて行ったことを知っている。又或る詩人が、東京

を描くことをあきらめて、信州の山の中ばかりをうたいつづけていることを知っている。又或る芸術家が、嘗ては何等かの夢を築く舞台であり得た東京をもうあきらめて固く沈黙しはじめたのを知っている。——我々は既に東京を失っているのかも知れない。我々是我々の悲しい身振りを、別れの身振りを、もう演じだしたのである。私にはそれを旨く演じるより仕方がない。最後の問題は、各人のために、各人のなかに、残されているのである。(加藤周一「東京」、1941)⁶⁹⁾

この「東京」において加藤は、「昔は豊国と春水と柳亭種彦の江戸があった。彼方にはニノン・ヴァランとストラヴィンスキイとポオル・ヴァレリイとの巴里がある」とも書いている。この一文は「何が美しいかといふこと」において、加藤が想定した純粹の日本文化と西洋文化がどのようなものであったかの参考になるだろう。1941年夏頃の加藤の見解の延長線上に49年の論考があるとするれば、東京の文化を「西洋風の文化と日本風の文化とが複雑なかたちで混りあつてゐる」と評することも意外ではない。戦前から敗戦後まで、加藤が日本文化について述べる時、江戸時代から明治時代にかけての伝統の連続性に懐疑的であったということが出来る。

加藤は、41年夏頃にはすでに「客観的にはなんと云う貧弱さであろうか！私の生れた時代は！私の置かれた東京は！」と東京の文化に悲観的であった。その貧弱な東京であっても、東京を失うことに加藤は悲しみを感じていた。敗戦後の加藤は、東京の江戸文化がことごとく破壊されたという感を強めていたのであろう。さらに、加藤が失うことを恐れた「東京」とは、その街並みのみならず、東京に息づく文化までも含むことは、明らかである。

しかし、加藤は戦後、「焼け跡の美学」(1946)において、焼け跡の美を論じ、このように書いた。

焼け跡の美学、東京の巷の焼け跡の美学が可能である如く、日本の精

神の在り方も徹底的に破壊された跡でなければならない。〔…〕日本の精神は不合理な何ものかであり文明は非人間的な何ものかである。理性と人間性とを此処に見出し、真に文明の名に値する文明の素材をつくり出すためには、先ずその堅牢たる虚偽の様式を破らなければならない。〔…〕新たな秩序の建設、新たな道徳と文明との再建は、さればこそ、必要にして欠くことを得ないが、又、さればこそ、建設に名を借りて、破壊を避け、体裁をつくらって本質の変化を欲しない反動的陰謀を粉砕し尽くさなければならない。(加藤周一「焼け跡の美学」1946)⁷⁰⁾

この文章には、「激しい怒り」とともに、戦後日本民主主義の出発点としての敗戦の面がよく現れている。また、「日本の精神は不合理な何ものかであり文明は非人間的な何ものかである」というこの時期の加藤の率直な心情は、1949年の「日本語の運命」に至るまで、日本的なるものへの不信感として残っていたのだろう。

しかし、「日本文化の雑種性」の後、「果たして断絶はあるか」(1957)において、加藤はむしろ日本文化の歴史的連続性を強調する立場をとる。「日本文化の雑種性」をはさむ加藤の変遷についての詳論は他日を期したい。

終わりに

渡辺一夫のエッセイや『思想の科学』座談会、加藤の「日本語の運命」に見られたように、敗戦後の日本の知識人は占領軍主導の民主化をいかに日本に根付かせるかということ、戦争の記憶がまだ鮮明によみがえる中で、非常に切実な問題として捉えていた。また、戦後日本の改革が占領軍によって「外から」着手されてしまったことに対して丸山眞男は苦い自覚があったと平石直明は指摘している⁷¹⁾が、同様の苦い自覚を渡辺一夫、川島武宜、加藤周一は共有していたと言える。平石は敗戦直後に言われた「精神革命」の

主張に、外からの民主主義化ではなく、民主主義を国民が自主的に、自発的に開始していかねばならないという、重松俊明、大塚久雄、川島武宜ら知識人の問題意識を浮かび上がらせる。川島が日本の民主革命にとってはとりわけ「精神的主体的な面」が重要だとしたのも、同じ理由に基づくと平石は述べている。広範な民衆が「近代的な自主的精神」「自らを主体者として意識する精神」をわがものとしなければならぬと考える川島が国語国字問題において、ローマ字表記を推進する立場にたったことを鑑みると、加藤の「日本語の運命」は、必ずしも加藤の特殊な発想でなく、敗戦直後の知識人たちにある程度共有されていた、日本国民の自主的な民主主義を養う立場からであったことがわかる。

そこから、渡仏を経て加藤が「日本文化の雑種性」の発想へたどり着くための道筋として、若き日の『万葉集』輪読会の経験、実朝の歌へ親しんだ経験を度外視することはできない。祖国のプロパガンダとして和歌が利用される時代にあつて、加藤が『万葉集』をすら批判したことは樋口陽一の指摘する通りである。しかし加藤は『続羊の歌』に、フランスの「抵抗」の文学との接触によって「日本の後れ」を確信し、加藤自身のフランス文学理解の「後れ」の自覚も促されたと回想している。『続羊の歌』では、この「日本の後れ」と自らのフランス文学理解の「後れ」を取り戻すことが、渡仏への動機として描かれている。フランスへの希望が広がる一方で、渡辺一夫が投げかける「ほんとうに日本と日本人は変わったのでしょうか」という問いは、その後、加藤が自問自答し続けた問いであろう⁷²⁾。

加藤がこの「日本的なるものへの呪詛」を一度抱きつつも、「日本文化の雑種性」を著し、『日本文学史序説』に代表されるように『万葉集』を再び語ることができたのは、若き日の『万葉集』輪読会の経験や、戦中のマチネ・ポエティックの詩作を通して日本語の秩序と音韻に向き合っていた経験が大きく影響を及ぼしているように見える。「日本語の運命」はその過渡期にあった加藤の逡巡をよく伝えてくれる。

このような加藤の辿った道筋を考えれば、「日本文化の雑種性」における「日本を西洋化することが急務であり、しかもそれは万事にわたらなければならない」という考え方が生まれたとすれば、その考えはもはや戦時中の日本文化主義のうらがえし以外のものではあるまい」という一文の重みが増す。

「雑種文化」の発想は、このように、加藤自身が、西洋文化と日本文化のすでに混交した東京で育ち、戦争を体験したことと深く結びついているところから生まれたと考えられる。「雑種文化」の源流をたどるために、第一高等学校時代の加藤まで遡り、加藤に影響を与えた作家や作品を分析することを、今後の課題としたい。

以上

注

- 1) 『加藤周一著作集第14巻 羊の歌』平凡社、1979、272頁。
- 2) 鷺巣力編『加藤周一が書いた加藤周一』平凡社、2009、31-32頁。
- 3) 『立命館大学人文科学研究紀要』第129号、2021、161-200頁。
- 4) 前掲『加藤周一が書いた加藤周一』16頁。
- 5) 加藤周一「日本文化の雑種性」『加藤周一自選集』第2巻、岩波書店、2009、9頁。
- 6) 同上。
- 7) 三浦信孝・鷺巣力共編『加藤周一を21世紀に引き継ぐために——加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社、2020。本書は2019年、日仏会館・立命館大学で開催された加藤周一生誕百年国際シンポジウムの記録を基に編まれた講演録集である。
- 8) 加藤周一「日本語の運命」『展望』(48)、筑摩書房、1949。
- 9) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』30頁。
- 10) この間の加藤とフランス文学については、岩津航『レトリックの戦場——加藤周一とフランス文学』(丸善出版、2021)に詳しい。
- 11) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』30頁。
- 12) 『加藤周一著作集第8巻』、平凡社、1979、53頁。
- 13) 岩津航『レトリックの戦場』丸善出版、2021、54-55頁。
- 14) 『加藤周一著作集第8巻』、平凡社、1979、54頁。
- 15) 前掲『加藤周一著作集第8巻』47頁。

- 16) 「立命館大学／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」において全ページを公開。
- 17) 加藤周一「知識人の任務」『加藤周一著作集』第8巻、平凡社、1979、70頁。
- 18) 海老坂武「〈戦争文化〉への抵抗をめぐる」『加藤周一を21世紀に引き継ぐために——加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社、2020、217頁。
- 19) 海老坂武「いかにして〈戦争文化〉と闘うか」、三浦信孝編『戦後思想の光と影』風光社、2015、26頁。
- 20) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』211-212頁。
- 21) 海老坂武「いかにして〈戦争文化〉と闘うか」、三浦信孝編『戦後思想の光と影』風行社、2015、26頁。
- 22) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』212頁。
- 23) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』217頁。
- 24) 加藤周一「ジャポングレまたはフラングレの事」1975年、『加藤周一著作集』第15巻、平凡社、1979。
- 25) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』、217-218頁。
- 26) 『加藤周一自選集』第10巻、岩波書店、2010、455-456頁。
- 27) 『展望』48号、筑摩書房、1949年12月、26-30頁。
- 28) 加藤周一「『現代詩』第二芸術論」の初出は『文芸』6(9)、河出書房、1949年9月。鮎川信夫編『現代詩論大系』第1巻(思潮社、1965)に再録、本稿はこれを参照した。
- 29) 加藤がこのように主張した背景には戦時中の戦争詩に対する批判も込められていたであろう。戦争詩についても詳細に論じた小関素明「天皇制と「大東亜戦争」関与の精神構造—負い目と擬態の精神史—」(『立命館大学人文科学研究紀要』第129号、7-90頁)は、この時代の戦争と文学、またマチネ・ポエティクの活動を考える上で重要な問題を提起している。
- 30) 前掲『展望』48号に同時に掲載された、なかの・しげはる「言葉のこゝろ」にも同じような主張が見られる。共産党の文章がまずいという自省のうえで、もっとも革命的な政党でも、文化が上のほうだけに独占されていた日本的遺産を受け取っている状況を叩き破らねばならないという趣旨のことを述べる。(『展望』48号、37頁)
- 31) イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波現代文庫、2012、350頁。
- 32) 前掲、イ・ヨンスク『「国語」という思想』、336頁。
- 33) 前掲、イ・ヨンスク『「国語」という思想』、337頁。
- 34) 前掲、イ・ヨンスク『「国語」という思想』、338-339頁。
- 35) 前掲『展望』48号、26頁。
- 36) 前掲『展望』48号、28頁。
- 37) 前掲、イ・ヨンスク『「国語」という思想』、351-352頁。

- 38) 前掲、イ・ヨンスク『「国語」という思想』、363頁。
- 39) 前掲『展望』48号、29頁。
- 40) 渡辺一夫『宿命についてなど』白水社、1950、129-131頁。
- 41) 渡辺一夫『宿命についてなど』、131頁。
- 42) 前掲『加藤周一著作集第8巻』23頁。
- 43) 『思想の科学』3(9)、1948年11月号、59-60頁。
- 44) エイブラハム・マイヤー・ハルパーン(1914-1985)は1946年から1948年後半まで、民間情報教育局(CI&E)の教育課で、「language simplification 言語簡易化」と呼ばれていた政策についての顧問を務めた(マーシャル・アンガー『占領下日本の表記改革——忘れられたローマ字による教育実験』奥村陸世訳、三元社、2001、100頁)。
- 45) 『思想の科学』3(9)、1948年11月号、61頁。
- 46) 座談会「新しい文学の方向」(『展望』50号1950年2月掲載)か。出席者は三島由紀夫、中村光夫、加藤周一、小田切秀雄、野間宏、椎名麟三。
- 47) 前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』、217-218頁
- 48) 斎藤茂吉『つきかけ』『蜜柑』朝日新聞掲載時、最初の一行はなし。
- 49) 高浜虚子「六百五十句」に所収。昭和二四年十二月二十日の句だが、新聞掲載時と異なる。
- 50) Sartreの名前は「青春ノート」も含めた日記の中で、おそらく初出か。Sartreを読む仕事とは何か。(一番古いのは1947年1月「サルトルの誤解——無縁の衆生“実存主義”」)1950年2月には『大百科事典』新補遺2、平凡社にサルトルの項目を執筆し、同年3月には立て続けに二本サルトルに関する原稿を発表している。
- 51) 『現代フランス文学論』(河出書房、1951年10月)か。
- 52) 「東北大学で空太郎を知ること深かった河野与一先生からは、「空太郎の満足すべき伝記はない。君が書きなさい。できる限りの援助はする」とまで言われていた」(「短いまえがき なぜこの三人か」『加藤周一自選集』第10巻、481頁)と加藤は最晩年に回想しているが、いつ河野与一と話したのかは不明である。この前書きには「文筆に専念する中で」とあり、1949年の2本の木下空太郎論から、文筆業に専念して以降も、継続して木下空太郎への関心を持ち続けたことがうかがわれる。鷗外への関心は八冊の『青春ノート』にもしばしば語られていることから「鷗外・茂吉・空太郎」の三人は、それぞれ、早くから加藤が執筆の主題に選んでいたと言える。
- 53) 「立命館大学／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」において全ページを公開。
- 54) 前掲『加藤周一青春ノート』、147-148頁。
- 55) 斎藤茂太「茂吉のことども」加藤周一編『近代の詩人第3巻 斎藤茂吉』(潮出版社、1993)付録月報、8頁。
- 56) 加藤周一編『近代の詩人三 斎藤茂吉』、潮出版、1993、57頁。
- 57) 立命館大学／加藤周一文庫デジタルアーカイブ「Journal Intime 1948 1949」

- 58) 加藤の最初の妻、加藤綾子。旧姓は中西。
- 59) 立石芳枝・龍彦姉弟か。
- 60) 鷺巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』、岩波書店、2018、346頁。
- 61) 『加藤周一著作集第14巻』平凡社、1979、262-264頁
- 62) 鷺巣力、前掲『いかにして』、350頁。
- 63) 加藤周一「何が美しいかといふこと——庭とブギヴギとについて」『女性線』4(5)、女性線社、1949年5月
- 64) 加藤周一、前掲「何が美しいかといふこと」、12-13頁。
- 65) 鷺巣力、前掲『いかにして』、340-341頁。
- 66) 加藤周一、前掲「何が美しいかといふこと」、17頁。
- 67) 加藤周一、前掲「何が美しいかといふこと」、18頁。
- 68) 加藤周一、前掲「何が美しいかといふこと」、13頁。
- 69) 鷺巣力・半田侑子編『加藤周一青春ノート——1937-1942』人文書院、2019、240-241頁。
- 70) 前掲『加藤周一著作集第8巻』47-48頁。
- 71) 平石直昭『福沢諭吉と丸山眞男——近現代日本の思想的原点』、北海道大学出版社、2022、235頁。
- 72) 前掲『加藤周一著作集』第14巻、255-256頁。